

日本建築学会北海道支部 第29回北海道建築作品発表会

北海道の建築の新しい方向性を探って

齊藤 雅也

札幌市立大学 デザイン学部

本作品発表会は、今年で29回目を迎える。30年近く、しかも毎年続いてきた背景には、本誌の読者をはじめ、北海道建築界の関係者の方々の大変なご努力・ご苦労があったに違いない。日本建築学会には北海道を含めて全国に9支部あるが、毎年、立派な作品集を刊行し発表会を継続しているのはどうも北海道だけのようである。いろいろな面で歴史が短いとされる北海道で、これは一寸珍しいことではないか、この北海道建築界の原動力はいったい何であるかをふと考えてみた。筆者の専門は建築環境学で、作品発表会の歴史や将来を語るほどの十分なキャリアはなく、9年前に横浜から札幌に移り住んだいわゆる他所者だが、来た当時の「雪どけ直後のお花見」の衝撃と同じくらい、学会支部での出来事が強く印象に残っている。それは研究発表会（こちらは82回を数える）や環境工学委員会に出席したときのことだ。表現が適切かわからないが、誤解を恐れずに言えば、集まったメンバーの物理的距離は（北海道は広いので）遠くとも、心理的距離は近く、「立場を超えて思っていることを言える環境」、「（寒冷地であるが）熱い環境」であるということが、本州（内地）の雰囲気とは大きく異なるものであった。自然環境の厳しさと隣り合い、寒い室内で小さな暖を採りながら侃々諤々ディスカッションをする、寒冷地だが心は冷めていない土壤が北海道にあったからこそ、29回という連続たる実績があるのではないかと感じるのだ。

建築環境学を例にすると、北海道における現代建築の断熱や気密に関する技術的課題は、今から20年も前に既に克服されたと言える。北海道は、いま地球環境問題を背景に、国全体がようやく真剣になって取り組んでいる環境技術に関わる研究や技術開発を20年も前倒しで行なっていた先進地と言えよう。当時、建築の設計者、環境工学者だけでなく、材料施工、建築構造、建築経済などの建築に関わるさまざまな分野の専門家が関わったことによって、技術的克服をみたのではないかと考えられる。それがいま国の基準づくりにも大きく反映されている。ただ、この10数年は、景気の低迷もあって、最近の建築界が（経済的に）元気か、と問われれば、筆者も否定せざるを得ない。しかし、本当にそうなのだろうかと再自問すると、まだまだやるべきことはあるように思う。

暖冷房や照明に関わる化石燃料の使用は、北海道も例外なく過去20~30年の間、漸増してきており、事務所や商業建築だけでなく、住宅の化石燃料使用の抑制はより一層重要になってくることが予想される。また、暖冷房や照明などの燃料消費は快適性とは二律背反と捉えがちで、燃料消費を削減するのであれば、快適性はある程度、犠牲にせざるを得ないとと思われる傾向が強い。しかし、いわゆる省エネルギー性と快適性が互いに矛盾しない可能性をどう見出すかは、北海道がこれまで培ってきた建築のハード面の研究・技術開発の蓄積の上に構築すべき新しいテーマ、技術変革への兆しになるのではないかと筆者は考える。かつては、寒冷地であるが故に、断熱を疎かにすると、温暖地と違って住まい手を時には死に至らしめる厳しさがあり、研究・技術開発のベクトルは自然と対峙する側に立ってきた。しかし、今後はその視点を少し変えて、私たちヒトが自然とどのようにして向き合うことができるか、自然のポテンシャルを活かす住まい方を（我慢するのではなく）どのように実践できるかという視点が必要なのではないだろうか。筆者にとっては、つまり、ソフト技術（住まい方）が、北海道の優れたハード技術とどのように調和するかについて北海道の建築が果たすべき役割はまだあると考えている。具体的にいえば、建築設計者や技術者が建築の光や熱、空気のコントロールについて計画する中に、住まい手が実際にそれらを上手に使いこなすためのアクティビティーをどう織り込むか、またそれを住まい手が持続発展していくかが問われているように思う。今後も、さまざま

な分野の人たちの関わりの中で、新たなパラダイム、それを補完する建築技術・住まい術が切り開かれていく必要があるのではないかだろうか。そんな活動の繰り返しが、北海道の風土をより活性化していくことに繋がるのではないかと感じている。

以上のような筆者が考える北海道の建築の新しい方向性に照らして、今年の作品を（多少、恣意的かも知れないが）見ていくたい。今年は全部で30作品の応募があった。住宅が15作品（うち集合住宅が2作品）、宿泊施設が3作品、事務所建築が2作品、社会教育・研究施設が4作品、医療施設が2作品、宗教施設が4作品である。不況を反映してか、事務所建築が例年に比べて少ないが、住宅が全体の半分を占めているのは、個人的にはとても興味深い。なぜなら、住宅こそ物理的・心理的な環境性能が最も現れやすいのではないか、そんな思いがあるからである。クライアントが自邸の計画を設計者に依頼するにあたって、何を大事にして、建築設計者はクライアントからの要求にどのように呼応し何を提案したか、それが建築環境のハードやソフトに関わる面ではどのようなことなのかを作品発表会では注目したいと考えている。

寒冷地である北海道の採光手法として筆者が注目したのは、No.20の川人洋志・菊池規雄氏による「W」で、内からの眺望と外からの景観というふたつの面を満足する計画に斬新さを感じた。No.3の堀尾浩氏の「空方の家」は、ボイド空間を照らす光の移ろいが住まい手に自然な時の流れを提供している。2作品については、中央のボイドから窓を透過して入射する光が熱に変わり、それが住まい方に何らかの影響を与えるなど、室内での光や熱の振る舞いと住まい手のコントロールのインタラクティブな関係性が創出されることを予感させ、寒冷地のポテンシャルを活かした住宅の好例と思う。その他にNo.4の五十嵐淳氏のworks 2009の中の「湘南の家」、No.19の山之内裕一氏の「真駒内東町の家」、No.27の遠藤謙一良・倉本淳平氏の「スパイラルハウス」などに見られるボイド空間を通した夏・冬の熱・空気の流れの計画、No.26のアトリエブンクの「澄川の家」の「温度の輪」の計画がある。「澄川の家」では温熱シミュレーションが採用されている。これまで大規模建築で比較的多く行なわれてきた手法だが、住宅にも採用されるようになった実感を得た。しかし、筆者が最近気になっていることとして、(特に若い)設計者や技術者が、設計に対する哲学と自身の体感に基づくゆるぎない情報を伴わずに数値シミュレーションの結果を頼りに簡単に計画が進められる傾向が全国的に増えてきているよりも感じる。学校での建築設計教育・環境工学演習における新たな課題ともいえるであろう。そういう意味では、小室雅伸氏のNo.1「札幌北部教会」とNo.2「福田歯科」は、設計者の成熟した温熱環境へのこだわりが、クライアントの住まい方を持続発展的に支援しようとする意気込みとして感じられ、安心感が得られた。

昨年のサミット会場となったNo.30の「北海道洞爺湖サミット国際メディアセンター（北海道開発局・山下設計・日本設計・竹中工務店）」には、最新のさまざまな環境技術が採用され世界的にも注目されたが、今後は、それらの要素技術を住宅のステージにどのように落としこんでいくかが鍵になると見える。しかし、(誤解を恐れずにいえば)パッチワーク的にハイテクな環境技術を貼り付けていく何かの点数稼ぎのような住宅では、持続発展する住まい方は演出されないように思う。設計者や技術者は、求められる機能に対するローテクも含めた要素技術の統合を模索しながら、空間構成にその解を見出し、住まい手のアクティビティーを創出することが今後はさらに問われる時代になるのだろう。紙面の都合でここに紹介できない作品についても、北海道建築の新たな展開を示唆する好例が多かった。建築の優れたハード技術による住まい方支援への新たな設計の方向性を感じさせる作品が今後も出てくることを願いたい。

最後に、本稿執筆中の11月9日、北海道建築界の牽引役を長きにわたって務めてこられた上遠野徹先生が他界されました。本作品発表会が29回目を迎えたことも上遠野先生のご尽力が大きかったものと思います。個人的には、ご自邸に学生と共にお邪魔して、上遠野先生に自らご案内いただいたことが今でも印象に残っています。2005年に開催された「清家清展・札幌」では実行委員長を務められ、開展準備でスタッフが心苦しいときにも温かい励ましのお言葉をいただきました。謹んで哀悼の意を表します。